

## 外国につながる就学前後の子どもたちへの文字言語習得支援の試み

### —実践を理論的に振り返る—

西川朋美・本林響子（お茶の水女子大学大学院）

劉蓉蓉（お茶の水女子大学大学院大学院生）

#### 1. 本研究の目的

本研究の目的は、日本国内で育つ外国につながる就学前後の子どもたちをとりまく複数の言語、つまり日本語と母語・継承語の習得・保持のあり方を検討することである。本プロジェクトでは、継続的な支援が可能な学校・地域での実践とは異なる大学内での実践の強みとして、実践と理論の結びつけを試みている。本発表では、これまで発表者らが子どもを対象として行ってきた実践を理論的に振り返り、今後の研究課題を見つけるという、探索的アプローチを取る。

#### 2. 本研究・実践の背景

大学院日本語教育コースの教員・学生有志が集まり始まったプロジェクトである（授業ではない）。外国につながる子どもを対象とした日本語及び母語・継承語の支援活動を新たに始めるに当たって「単発のワークショップ形式」「留学生の母語を活かし、両言語を育てるための支援」などの方向性を決めた上で、当初は identity text（例：Cummins, Hu, Markus & Montero, 2015）のような活動を想定していた。しかし、保護者同伴を条件としたワークショップへの参加申し込みは就学前の子どもが多く、また、小学生であっても母語・継承語でまとまった文章が書ける子どもはいなかった。そして、結果論ではあるが、本研究では外国につながる子どもを対象とした言語習得・教育研究において、就学前後の子どもを対象とした研究が少ないことに注目した。

#### 3. 「外国につながる子どものことばを育てるワークショップ」概要

2016年3月以降、計4回のワークショップ（各回2時間弱）を行った（第4回＝松田他、本大会ポスター発表）。個人的ネットワークやSNSなどを通して参加者を募り、各回3～7名であった（年齢は1歳8ヶ月～10歳）。日本語と母語・継承語（中国語・ベトナム語・タイ語）を用いて、子どもの弱いほうの言語（＝ほとんどの場合、日本語以外の言語）でのアウトプットを目指す活動を意識し、実践を行ってきた。また、2回目以降は、アウトプットを目指すために、特に母語・継承語でのインプットを活動中に十分に与えるために両言語での絵本の読み聞かせなども行った。4回目のワークショップからは、子どもたちの限定的な母語・継承語の力や発達段階（年齢）を踏まえて、（文レベルではなく）文字・単語レベルで文字言語を取り入れる活動を行っている。

ワークショップの回を重ねるごとに活動の幅も広がり、学生たちも子どもたちとの活動に慣れてきた。また、子どもを参加させた保護者のアンケートからも満足したとの声が大半であった。

#### 4. 実践と理論の結びつけ

2017年11月以降、実践者でもある発表者3名の内省や実践時のメールを振り返り、これまでの実践の中で見えてきた課題を理論的側面から話し合った。

いわゆる母語保持あるいは継承語支援の理論的根拠として用いられるものの1つに、「相互依存仮説（Interdependence Hypothesis）」（Cummins, 1979 [2001]）が挙げられる。これは、一般には「2言語環境で育つ子どもの2言語能力は基底では共有されている」という形で理解され、冰山モデ

ルと共にバイリンガルの両言語能力を捉えることの重要性を説く際に引用されることが多い。しかし、正確には、相互依存仮説とは、第1言語と第2言語の間での能力の転移可能性に関する仮説であり、「言語 X を媒介とする授業を受けて言語 X を伸ばすことができた度合いに応じて、言語 X の能力の言語 Y への転移が起こりうる。ただし、その条件としては、言語 Y への十分な接触と言語 Y を学ぶ充分な動機があることが必要である。」(Cummins 1981, p.29, cited in Cummins 2000, p.38, 訳: 本林 2006, p.25) と定義されている。

この転移可能性を検証した研究の例として Verhoeven (1994) がある。オランダのトルコ系 6 歳児を対象とし、オランダ語とトルコ語の能力(語用論、語彙、統語、音韻等)を縦断的に調査したところ、語彙や統語的側面においての言語的転移は限られていたこと、逆に語用論的、音韻的及びリテラシーの側面においては相互依存仮説を支持するような結果となったと報告されている。このように相互依存の程度は言語能力を構成する側面によって異なると考えられる。

また、同じく縦断的デザインを採用し相互依存を検証した Moser, Bayer & Tomasik (2018) は、スイスのバイリンガル幼稚園児 181 名を対象に、継承語(アルバニア語、ポルトガル語等)の指導を行う実験群と指導を行わない統制群を設け、両グループのドイツ語ともう一方の言語の能力(音韻意識、語彙、読解)を比較した。これは、継承語指導が継承語だけでなく学校言語であるドイツ語の発達にも効果があるという仮説のもとに行われたものだが、結果としては、仮説は支持されていない。ただし、実験群と統制群の違いは、教室活動や保護者支援の有無といったマクロなものであり、より焦点化された指導であれば結果が異なる可能性は残る。

以上のような理論と実証研究、また、ワークショップでの実践の流れから、本プロジェクトでは、今後、子どもたちの 2 言語でのリテラシー能力(ここでは読み書き能力)の発達に注目したい。本ワークショップの参加者の場合、年齢的には萌芽的リテラシーの発達期にあっており、萌芽的リテラシーを 2 言語で育てるにはどうしたらよいかという問題になる。

## 5. 今後の方向性

バイリンガルの子どもの 2 言語の共有基底能力は(少なくともバイリンガルの子どもの教育に関わる人間の間では)当然視されている観があるものの、文字言語の知識や萌芽的リテラシーが「相互依存仮説」の中にどう位置づけられているかについては、検討の余地が残る。しかし、例えば、日本で育ちながら家庭内では中国語で育つ子どもが、就学前に中国語の文字言語を習得することは、読み書き能力の習得が課題となることが多い継承語の力を伸ばすための基礎となり、日本語での読み書き能力(正確な表記を含む)を身につけるための基礎ともなり得る。

今後、ワークショップでの実践において、上記を意識した活動を充実させると共に、参加者の母語・継承語での文字言語の知識をより正確に把握する必要がある。また、子どもの 2 言語での文字言語・萌芽的リテラシーの習得について、例えば、子どもが中国語と日本語で正確に文字表記をする能力を横断的・量的に検証したり、文字表記能力と音韻的能力の関係を検証したりすることで、2 言語環境で育つ子どものリテラシー能力の習得の理論的な位置づけも求められる。

## 主な引用文献

Cummins, J. (2000). *Language, power and pedagogy: Bilingual children in the crossfire*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Moser, U., Bayer, N., & Tomasik, M. (2018). Language skill transfer effects: Moving from heritage language to school language in kindergarten. In R. Berthele & A. Lambelet (eds.), *Heritage and school language literacy development in migrant children: Interdependence or independence?*